

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 出前講座の現場から 1
- 知ることが行動への第一歩 生徒たちの声 2,3
- 地球の木25周年記念事業講演 4
- 支援地から ラオス/ネパール 4,5
- 25周年記念事業「ラオスで子育て12年」 6
- 気仙沼だより その14 7
- 地球の木で活動する「私の場合」 7
- 活動日誌(6~7月抜粋) 7
- もったいないキャンペーン 7
- INFORMATION 8

出前講座の現場から

(出前講座チーム 乳井京子)

地球の木は、設立以来25年間、アジアの国々で貧困、環境破壊、人権侵害などに苦しむ人々に寄り添う支援を行ってきました。ネパールの識字教室の参加者は、「字の読み書きができるようになって、これまで暗闇だった私の人生に光が差した」と喜んでくれました。年間約5,000円の貸付金が、小さなビジネスを生み出し、「子どもを学校に行かせることができるようになった」「家計に役立っている」と村人から感謝の声が届いています。しかし、広く世界に目を向けると、問題は山積しており、私たちが支援できるのはごく限られた地域でしかありません。



横浜市立平楽中学校「ネパールわくわくワークショップ」

ヒマラヤの鉄砲水と私たち

ところで、これら不条理な問題は、一体どこから来ているのでしょうか？政府の無策？教育の欠如？企業の横暴？私は、地球の木で活動を始めて、これらの問題が、実は私たちの暮らし方と密接にかかわっているということに気付かされました。2000年にネパールからSOARS(パートナーNGO)のニルマラさんとシュレスタさんを招聘した時、日本のモノに溢れ、電気をたくさん使う暮らしを目の当たりにしたシュレスタさんが言った言葉が忘れられません。「先進国で電気をたくさん使って、地球の温暖化が進んでいる。ネパールではヒマラヤの氷河が溶け、鉄砲水で電気のない村が流される」

私たちが自らの暮らしを見直すこと。ここが「地球市民教育」の始まりでした。そして、この活動を私たちは、海外支援と並ぶ、地球の木の活動の2本柱に据え、地球の木講座や出前講座、スタディツアーなどの活動を続けてきました。

出前講座って？

今号では、出前講座についてご報告したいと思います。バナナを通して私たちの「買う」という行為が、海の向こうの生産者にどのような影響を及ぼすかを考える「マジカルバナナ」、ネパールの支援活動の中から生まれた「ネパール・タルー族の家

族ゲーム」と「ネパールわくわくワークショップ」、世界の多様性と格差を体験する「世界がもし100人の村だったら」、世界の貿易の仕組み、どんどん広がる経済格差を体験する「貿易ゲーム」、援助とは何かを深く考えさせられる「援助する前に考えよう」、地産地消の大切さを学ぶ「未来の食卓」、ラオスチームが最近完成させたワークショップ「森を守る・暮らしを守る」など、地球の木の出前講座メニューは、種類も豊富です。

大忙しの出前講座チーム

今年度のお出前講座も、5月の「国際学習」からスタートしました。18年間この取り組みを続けている横浜市立平楽中学校は、「よこはま子ども国際平和スピーチコンテスト」で優勝し、国連にピース・メッセンジャーを送った、輝かしい歴史を持つ国際学習のモデル校です。今年は、3講座の依頼があり、「ネパールわくわくワークショップ」、「未来の食卓」、「ラオスワークショップ」を行ってきました。

また、6月には、鎌倉女学院の「国際セミナー」で「ネパール・タルー族の家族ゲーム～識字がもたらすもの～」と「未来の食卓」のワークショップを高校1年生対象に2クラスずつ、7月には、町田市立真光寺中学校で「ネパールわくわくワークショップ」を行いました。

知ることが行動への第一歩 ～生徒たちの声～

鎌倉女学院では、16年間の国際セミナーの成果が出て、国際関係の大学に行く生徒、国際関係の仕事に就きたいという生徒が出ていますと校長先生。以下、ワークショップの感想文から、生徒たちにどのような気付きがあったかをご紹介します。

★「ネパール・タルー族の家族ゲーム ～識字がもたらすもの～」 (鎌倉女学院高1年)

カースト制度のために能力があっても家にすら入れてもらえない人がいること、彼らに読み書きを教えるためにこっそりと家に招き入れてあげる勇気を持っている人がいると知り、悲しくあたたかい気持ちになりました。今までは募金しかしてこなかったのですが、「幸せじゃなければ支援じゃない」と聞いて、相手の立場になって考えることの大切さを学びました。今回のような機会がなければ知ることなかった彼らの不遇な環境を見て、今までの自分が恥ずかしくなり、これから自ら進んで知っていつ、力にならなければと思いました。(W.E)

格差をなくしていく努力を1人1人がすることが大切だと思った。また、デブラニの話聞いて、大変な環境の中でも自分の意志を持ち、自分のためだけでなく、人のためにも学ぶ姿勢に感動した。この講義を受けて、これから私は、自分が当たり前前に学んでいることに感謝し、学んだことを人のためにいかしていきたいと思った。(O.R)



町田市立真光寺中学校で「未来の食卓」

「支援することだけでは世界は変わらない。暮らしを見直すことが大切」と最後におっしゃっていたことが印象に残った。国際問題に対する活動という支援することばかりに目がいて、自分の生活のことは意外と考えられていないことにも改めて気付かされる言葉だった。(T.Y)

今回のワークショップを受けて、識字の大切さを痛感しました。字が読めることで、安心、安全、自信が生まれ、物質的には豊かでなくても、精神的に豊かになると思います。字が読める私たちにできることは何なのか考えました。(O.S)

一人のネパール人と出会ったことがきっかけとおっしゃっていたので、私も色々な人と関わって、出会いを大切に、これからの自分に役立てていきたいなと思いました。(K.S)

自分が学んだもの、得たものを共有して幸せを分かち合うことが国際協力につながると思いました。(H.A)

★「ネパールわくわくワークショップ」(平楽中1年)

私は、今回の国際の授業を受けて、ネパールについてよく知ることができました。国旗の意味、山のこと、日本とちがう現地の過ごし方、その道具、そして差別のこと。水のゲームをして、字が読めない現地の人の大変さが分かりました。女性の強さを感じました。自分達で集まって、自分たちで学んでいる話を聞いて、周りに負けない強さを感じました。私も自分達でやってみることに、協力することの大切さを感じました。今日は本当にありがとうございました。(N.R)



ネパール元支援地からの留学生リタさんも大活躍

★「未来の食卓」(平楽中3年)

世界各国の1週間分の食べ物を見て、差がとてもあることにおどろきました。日本で今、満足に食事ができていることが、とても幸せなことだと実感しました。あと、日本は、食料自給率が低いので、もっと上がったらいいなと思いました。今まで知らなかったことをしっかり学べて良かったです。(M.S)

フードマイレージ=距離×重量、自分達の食卓に届くまで、すごい量をかけていることがわかり、おどろきました。これからは産地を確認して買いたいと思います。(F.K)



フードマイレージが高いのはどのメニュー？

★「未来の食卓」(鎌倉女学院高1年)

グループでの話し合いが多く出来、それぞれ思うことを共有出来て面白かった。食の身近さに気づき、自分達が何を出来るのか、日本で何を出来るのかを深く追究出来た。大人になった時、一体日本は、世界は、食生活は変わっているのか、私一人から文化を守るために何かしていかなければと思った。

日本のスーパーに行くと、外国産のものをよく見かけるが、世界の国と比べ、日本のフードマイレージが高く、その分環境にも影響を及ぼしたり他国に迷惑をかけているということに驚いた。地球温暖化対策として、エアコンや車からのCO2排出を抑えようという声をよく耳にするが、それだけでなく、輸入によるCO2排出についても注意すべきだと思った。また、一見、日本の食糧事情は、豊かに見えるけれど、その裏には、犠牲になる土地や人が多くいるということやその大半を輸入に頼っているという多くの問題があり、それは改善されるべきだと思う。そのために、私は、食品を買うときには、国産のものを選ぶと思う。(T.K)

最初に1週間の食料の写真を見てどこの国なのかというのを考えるとき、外見で判断してしまい、なかなか当てられませんでした。欧米の国々では、量も多く種類が豊富だが、アフリカの国は種類も少なく栄養が偏っている気がしました。フードマイレージの計算でも、日本は数値が高いとは思っていましたが、ここまで高いとは思いませんでした。近年、食の欧米化が進んだことにより、輸入が増えてしまい、結果、日本の伝統も失われつつあるので、もう一度この現状を見直して危機感を持って未来に向かっていきたいと思っています。話し合いで他の人の意見も聞けて良かったです。(K.M)

★「ラオスワークショップ
森を守る・暮らしを守る」(平楽中3年)

ラオスの村は、日本と生活や宗教などが全然違うんだなと気付きました。また、前は森林が豊かだったのに今は、木材にするためや、ゴムの木を植えるために森林が伐採され焼きはらわれてしまって、減少してしまっているのを知り、わたしは、紙などをむだ使いしないようにしていこうと思いました。講習のアドバイスは、ゲームみたいなものを入れると、もっと良くなると思っています。でも、今回の講習は、とても分かりやすく良いものでした。(K.K)

今回はありがとうございました。ラオスの村の暮らしや食生活、日用品などが森で揃うことがすごいと思いました。タニシの中身をとるのにヤマアラシの毛を使っていたり、竹でできたバケツを運ぶものなど、子供のころから使ったり、運んだりしていて、すごいと思いました。リスや、アリの卵を食べると聞いたときは、本当に食べるのかとおどろきました。ラオスのミニしばいでおきたことが、本当におこると思うと悲しくなります。お金がもらえても、森を失う方が悲しいと思います。とても勉強になりました。(T.N)

* 出前講座の詳細は、地球の木ホームページをご覧ください。



精霊も登場するラオスのワークショップ

出前講座のお手伝いをしてくれる人を募集中。一緒に楽しく学びませんか。(お問合せは事務局まで)

地球の木25周年記念事業講演



力強いメッセージで訴えかける清水さん

一人ひとりが 1本の地球の木として

「地球の木が地域団体の利点を生かし、かつ、地に足がついた活動を広げていくにはどうしたらよいか。それには理解を共有する時間と労働を厭わずに多様で多彩な力で結集すること」—地球の木25周年記念事業講演「地球の木25周年によせて」(5月29日・横浜開港記念会館)で講師の清水俊弘さん(地球の木顧問)が示唆したメッセージである。JVCスタッフとして国内外でボランティア支援活動に長年携わってきた清水さん。講演では地球の木設立当時のエピソードを交えながら、当時から今日までの世界情勢と連動するNGOの役割変化、また、地球の木が果たす役割、さらに自身が山梨県で続けているオルタナティブな暮らしの実例をあげてボランティア活動のあり方とさらなる実践を述べた。

講演の核心でもある地球の木の活動の心がまえについて、「集団が活動していくために、もっと、もっと、地域にあるさまざまな力を結集していく事。それには物事を可能な限り単純化しないこと。また、無視しない選択肢が大事ではないか」と述べた。具体的な指針の一つとして、「地球の木は、神奈川と言う地域性のある集団だと思いたるので、そこをうまく『地縁』と言う地域集団としての利点を生かして貰ったらいいかなと思います。一人ひとりが一本の地球の木として大事だし、それを25年間培ってきた。そういう意味で神奈川に地球の木が一杯になって、地球の木を増やしていったらいいんじゃないかと思いたす」と語った。

清水さんは、2004年に開設した山梨県韮崎市穴山町のカフェの店を核に各種の活動(地元農家との農作物提携、さくらまつり、気仙沼応援のサンマ祭、小学生対象の英会話教室など)を展開しています。「僕も一本の地球の木だ」という立場で、オルタナティブな生活を実践しています。

(25周年記念事業実行委員会 野崎俊一)

この講演についてはホームページにも載っています。

from Laos

村人から村人へ 広がっていく活動の成果



ラタンを植えるN村のKさん

皆さん、こんにちは。今回は、サワナケート事業第1期(2009年~2012年)で初めて取り組んで、現在の第2期(2013年~)でも継続しているラタン(籐)栽培を題材に、村人から村人への活動の「拡がり」についてお伝えしたいと思います。

ラタンは日本では藤カゴや藤椅子に代表されるように工芸品のイメージが強いですが、ラオスではそれに加えて若芽を食用にします。有用な植物のため、野生のラタンから種を採って発芽を試みる村人はいましたが、発芽しない、あるいはしても非常に時間がかかる、という状態でした。JVCラオスでは2011年に活動対象村の数名の村人と東北タイを訪問し、高確率でしかも早くラタンを発芽させる方法を学び、ラオスに戻ってその発芽方法の研修を行いました。

その東北タイ訪問に参加した数名の村人の中に、S村のTさんがいました。Tさんは村に戻って熱心にラタン栽培に取り組んで成功していました。Tさんは、技術を身につけ、その人から他の人々にその技術が普及することを期待できる「モデル農家」と呼べる存在でした。では、モデル農家が誕生したとして、その後期待通りにいくものか。現実には様々な理由で期待通りいかないこともあるでしょうし、決まった期間で行われる開発援助の事

業では、単純にその後を確認できないこともあるでしょう。

先日S村を訪れた時のこと。森を歩いていると、案内してくれた村長が「ラタンがいっぱい植えてあるだろ、ラタン先生が植えたんだよ」と言ってある一角を指します。そのすぐ側の土地にもラタン苗が植えてあり、ご夫婦が働いています。ご主人のDさんによると、Tさんに教わってラタン苗を発芽させて植えるようになったとのこと。更に歩いていくと、向こうからTさんが。世の中、こういう「絵に描いたようなこと」ってたまに起きるんですね。「今年も2家族に教えたいし、今まで8家族に教えたいかな」と笑顔で語るTさん。どうも、話を聞いていると研修を受けた直後より、ここ2、3年こそ教えているようでした。JVCラオス農業チームリーダーのフンパンは「ラタンが大きく育てて皆が関心を持ったんだろう」とのこと。やはり目に見える成果は普及の第一歩です。

ちなみに、Dさんは「Tがタイで仕入れてきた技術らしいよ」と言っていました。JVCがTさんをタイに連れて行ったことは知らない様子。変に「JVCのおかげで」と持ち上げられるよりも現実味がある言葉でした。

(JVCラオス現地代表 平野将人)

from Nepal

プログラムが再開

昨年4月の大地震から1年が過ぎ、延期されていたプログラムは少しずつ再開されています。地震により多くの家屋、施設などに被害が及び、困難な生活が続いています。村の皆さんと話し合い、「幸せ分かち合いムーブメント」をさらに進め、生活再建に焦点を当てた活動に展開していくことになりました。引き続き、応援をお願いします。

村の再建に向けて

第2次緊急・復興支援として、仮設シェルターの建設と大工・石工のトレーニングが終了しました。全世帯への支援ができなかったため、対象者の選定に時間がかかりました。またインド国境封鎖により、資材が手に入らない時期がありました。昨年の9月から郡政府や地元の各関係者と丁寧な話し合いを行った結果、大きな争いごともなく、無事終了することができました。地球の木の支援でマンガルタル村に95戸、被害が大きかった隣村のボカリナラヤンスタン村にも50戸のシェルターが完成しました。日本とは違って、簡素なものではありますが、住宅再建が実現するまでの間、雨や風をしのぐには有効です。地域ごとにグループを作り、話し合い、今後も助け合う仕組みを作っています。

職業トレーニングは19名全員が、耐震性のある家屋建設のための2ヵ月間の研修と実地訓練を終了。このうち5名を支援しました。修了式では大工道具一式が贈られ、すぐに仕事が始められ



教師トレーニングを終えて



仮設シェルターができた!

る体制を作り、全員が仕事を得ることができました。村の大工・石工と情報交換をすることも計画されています。これから始まる再建に力を発揮するでしょう。修了者には、ネパール国内や海外で働く時にも有効な正式な資格試験を受けることを奨励しています。

第3次支援として、小学校の補助教室建設が2つの地域で始まっています。

情報発信と教師トレーニングが復活

6月に、待ちに待った地元発の季刊誌「ロシ・ラハール」第19号

が発行されました。58ページの地震特集です。内容は、大地震における被災者の状況、SAGUNの緊急支援、支援物資を届けた時の経験など。4月に実施した作文コンテストで最優秀賞を得たスジャン・ラム君の「大地震がもたらした子どもの教育への影響」も掲載されています。

また、6月23日と24日に、2年ぶりに教師トレーニングが行われました。主に幼稚園や小学校の先生18人が参加しました。テーマは「子どもの目線に立った教育法と課題」。参加者は、子どもに合った教材や環境づくりが大切なことはもちろん、子どもたちがのびのびと参加できる教室にすることに教師自身が大きな役割を果たすことも学びました。(ネパールチーム 丸谷士都子)

25周年記念事業 ラオスのお話会

7月3日「めーぷるキッズ(*)」

「ラオスで子育て12年」

講師の名村雅代さんのご主人は、JVC(日本国際ボランティアセンター)のラオス現地事務所の元代表。2002年、当時1歳だった長男を連れ家族でラオスに赴任し、その後、女の子2人に恵まれ、2014年に帰国するまでタケク、ピエンチャンで暮らしました。

名村さんの語るラオスの暮らしや人々の様子は、どこか懐かしさを感じ、興味深いものでした。お話とともに、ラオスで集めた貴重な布や織物の展示も行われ、参加者の質問にも丁寧に答えてくれました。



2人の娘さんの七五三には、ラオスの布を使ってなんとお祝着を手作りしたと話す名村さん(左)

子どもにやさしい社会

「最貧国と言われるラオスで12年も生活できたのは、誰もが子どもにやさしい社会だったから」と名村さん。レストランではどこでも「お母さん、ゆっくり食べてね」と言ってお店の人が上手に赤ちゃんを預かってくれます。安心して外食ができました。また、ラオスの飛行場のスタッフは子連れにとっても親切。遠くからでも駆けつけて、すぐに優先して誘導してくれます。そして、隣の家の人や、近所の人がいつも来て赤ちゃんを誰かしらが抱っこしてくれるのも大助かりしました。等々。

女の人だけでなく、男の人もお兄さんなども、とてもよく子どもたちの世話や相手をしてくれます。いろいろな人に接し子どもたちの人に対する信頼感が大いに培われました。

私もゆらゆらと揺れていた

タケクに住んでいた時のこと、隣家の女の子たちは、学校から帰るとすぐに家事に取り掛かります。大きなタライで洗濯をし、炭をおこしてお料理をします。決して家の犠牲になっているのではなく、娘さんたちは穏やかにしっかり育っていることが分かります。お母さんというのは、伝統的な高床式の家の下のハンモックで、気持ちよさげにゆらゆら揺れながら娘に指示を与えています。「ラオスのお母さんはストレスが溜まりません。日本のお母さんは1人で背負い過ぎ」と名村さん。そして「我が家は子どもたちには家事をしっかり仕込み、ゆらゆら揺れるラオス風でやりたい」と笑いながら付け加えました。

ゆったりと暮らす

首都ピエンチャンは、世界中から援助マンが来ていて外国人も多く暮らしています。そんな中、知り合いのラオス

人の先生や秘書などの職に就く女性たちは、みんな早々と結婚し、出産、そして、また仕事を始めます。赤ちゃんの子守は、姉や妹、あるいは田舎から来てもらった親戚の女の子が大喜びで引き受けています。女の子たちは一緒にのんびりと暮らし、赤ちゃんを抱っこしてゆらゆらと近所の散歩とおしゃべり。女性たちは安心して仕事を続けます。そして羨ましいことに、ラオス人は男性も女性もみんな4時には仕事をやめ一斉に帰宅します。時間的にゆとりのある暮らしができるのです。

幸せって何ですか?

「ラオスで育って100%良かった!」という息子さんが、学校の遠足で北部の少数民族の村に行きました。電気もシャワーもない村に泊まり、びっくりな体験もしましたが、歓待してくれた村の人たちの明るい自信に満ちた表情がとても印象的だったそうです。「幸せって何ですか?」と村のおじさんに聞いたら、「家族がいること、毎日ご飯が食べられること」と力強い答え。息子さんの心に深く刻まれたようです。「これを日本人も幸せと言えたら。もっとたくさんの人が幸せになるのではないかしら?」と名村さん。

日本に戻り、息子さんがいつも言うという「こんな便利な国なのに、日本人の表情は暗いね」という言葉にドキリとさせられました。経済的な豊かさが幸福につながるとは限らないということを改めて思いました。

(会報作成チーム 沼田由美子)

*会場の「めーぷるキッズ」は、都筑区のセンター北駅近くにある保育園。地産地消で床や壁などに神奈川の本材を多く使っています。中に入ると木のいい香りがぶーんとしました。

気仙沼支援報告
気仙沼だより
その14

25周年おめでとうございませう。

皆様との出会いから5年が経過

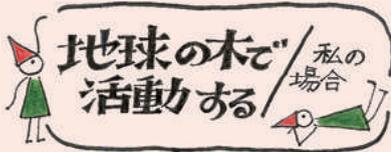
しました。震災初期からのご支

援、応援のおかげで、被災した人たたらも笑顔が着々と戻り、気仙沼市も復興の明るい道が見えてきました。初めてお会いした時の炊き出しや、仮設住宅でのお茶会。皆様が気仙沼市に来ていただいたことなど色々な思い出があり、感謝の気持ちでいっぱいです。『地球の木』は25周年とのことと、これまで、気仙沼市以外にも、ネパール、ラオス、カンボジアなど世界で長い間、たくさんの支援してきたことに感謝をうけました。私たちがTreeSeedも、『地球の木』さんと目標に頑張っています。『地球の木』さんの益々の活躍とご発展をお祈り申し上げますとともに、今後とも気仙沼市及びTreeSeedとよろしくお願いたします。

(TreeSeed 小野寺大志)



お祭りの様子



地球の木は今年度、25周年を迎えます。設立年の秋に、神奈川ネットの方に勧められたのが

きっかけで加入し私も25年、先の総会で感謝の記念品をいただきました。加入当時、日本の製造業は人件費の安い労働力を求めて、海外に生産拠点を移していました。安いというだけで進出して良いのかなという疑問もあり加入することで、ちょっとでもお役に立てるかなという気持ちでした。最初の頃は西湘ランチで、会報発送や講演会などを手伝っていましたが、その後、西湘ランチの会員として二宮から

横浜の運営委員会に入るようになって20年以上この活動に参加しています。現在は「たうんチーム」に所属し、地域のイベントに参加しそこで地球の木の活動をアピールしたり、「横浜まではちょっと遠くてね」という会員の方に活動の中身を知ってもらいたいと、報告会などを開催しています。

だいぶ前になりますが、フィリピン・ネグロス島を支援していた頃、スタディツアーに参加して驚いたことは、貧富の差がはっきりし、それが誰の目にも見えること、それでも若い人たちがバイタリティーにあふれ、表情が明るいことなどでした。なんとなく暗い今の日本の先行きが明るくなりますようにと願って活動をしています。

(たうんチーム 坂下まきみ)

活動日誌 (6月~7月 抜粋)

- 6月**
- 5日 第21回ふくしまつり出店
- 11日 出前講座 (鎌倉女学院高校)
- 11日 デポー展示会 (東戸塚)
- 24日 デポー展示会 (ライフタウン)
- 27日 第1回理事会
- 7月**
- 2日 出前講座 (真光寺中学校)
- 3日 25周年記念事業「ラオスで子育て12年」(めーぶるキッズ)
- 25日 第2回理事会

もったいないキャンペーン 第2弾
ただいま仕分け中



前回に引き続き福祉クラブ生協に呼び掛けた「もったいないキャンペーン」に今回も大勢の方からご協力をいただきました。ハガキ、切手、テレホンカード、貴金属など。ありがとうございました。



できました！ 2017年版 「地球の木」カレンダー

- カレンダータイトル：「輝く瞳」
- 写真家：田沼武能
来年のカレンダーは、各年代の子どもたちを通して「子どもの普遍性」を表すものを企画。
- サイズ：壁掛け：32cm×38.5cm (使用時 60cm×38.5cm)
卓上：15.5cm×17.8cm×7.5cm
- 制作元：日本国際ボランティアセンター (JVC)
- 価格(税込)：壁掛け：1,600円 卓上：1,300円

イベント情報

■「アクティブ・ラーニング： 社会参画をめざす参加型学習」

9月22日(木祝) 13:00～17:00
場 所：アートスクエア木月(川崎市)
講 師：カマル・フヤルさん、風巻浩さん
参加費：2,000円
共 催：かながわ開発教育センター

■地球の木講座「ネパールの開発の第一人者 カマル・フヤルさんが語る震災復興」

9月25日(日) 13:30～15:30
場 所：鶴見中央コミュニティハウス
講 師：カマル・フヤルさん
参加費：500円

■「みんなの声をまちづくりに活かす ～思いを形に変える～」

9月27日(火) 13:30～15:30
場 所：六会市民センター(藤沢市)
講 師：カマル・フヤルさん
参加費：500円



ネパールスタディツアー2017

2017年2月23日(木)～3月3日(金) 8泊9日
支援地の村を訪れ、暮らしを体験、交流します。
参加費：20万円

デポー展示会

10月22日(土) 東戸塚デポー
10月27日(木)、28日(金) みたけ台デポー
11月28日(月) らいふたうんデポー
12月1日(木)、2日(金) のぼりとデポー

藤沢市民まつり

9月24日(土) 10:00～16:00
場 所：秋葉台公園(藤沢市)
ワークショップ、活動紹介、クラフト販売で参加

ひらつか市民活動センターまつり

9月25日(日) 10:00～15:30
場 所：ひらつか市民活動センター
活動紹介、クラフト販売で参加



グローバルフェスタ2016

10月1日(土)、2日(日) 10:00～16:00
場 所：お台場・センタープラムナード公園
活動紹介、クラフト販売、海鮮チヂミ販売で参加

よこはま国際フェスタ2016

10月8日(土) 10:30～16:00
場 所：グランモール公園(みなとみらい)
活動紹介、クラフト販売で参加

なか区民活動センター祭り

10月9日(日) 10:00～15:30
場 所：なか区民活動センター
ワークショップ、活動紹介、クラフト販売で参加

かまくら国際交流フェスティバル2016

11月13日(日)
場 所：鎌倉高德院(鎌倉大仏)
活動紹介、クラフト販売、コーヒー販売で参加

東日本大震災・復興支援まつり

11月19日(土)
場 所：山下公園
活動紹介、クラフト販売で参加



オルタ館フェスタ

11月23日(水)・26日(土)
場 所：オルタナティブ生活館(新横浜)
活動紹介、クラフト販売で参加



特定非営利活動法人
地球の木



今年もまた、アメリカ在住の孫娘が日本の小学校(2年)に体験入学するために老夫婦の下にやってきた。「えっ!」と思うような日本語を知っているのは、いつもアイパッドで観ている「クレヨンしんちゃん」のせいらしい。私は寝る前に本を読んでやるのを楽しみにしているのだけれど、「クレヨンしんちゃん」には負けそうである。(KS)